

巡る話 杖か棒か

児玉潤子

(会員 佐伯市中江町)

椿原・八匹原はちくばるうめ秋大祭で念願の河尻の杖を見た。



画像① 河尻杖

河尻の杖は若者で構成されており、キレが良く、パフォーマンスとして見栄えするものである。聞けば、地元の人ではないとのこと、かれらは市の職員さんたちであり、毎年演じているため、数回の練習で手技を取り戻せるという。白杵東神野こうの、青山黒沢など高齢化が見える昨今、これは嬉しいやら、悲しいやらである。

待ちに待った河尻の杖では待望の口上が聞かれなかった。演技のあと何うと、時間が押し、省略を強いられたという。これも合同開催のなせるものか。

数か月前、本匠古文書解読会で、「これは門外不出じゃ。」と代表の芦刈成雄氏がおもむろにテキストを配布した。『天竺三伝来荒川流杖の事』との出会いである。

しかし、読み進むと、コピーにうっすらルビが振ってあり、「これは解読したことがあるんではありませんか。」と、聞くと、古参が「あ、これ、やったなあ。何年前かなあ。忘れとるけどな。」となり、大笑いしたのであるが、これは非常に興味深い内容で、古文書と接する時、思わぬところで目から鱗の気づきがある。

『天竺伝来荒川流杖の事』【大意】

天竺に十六の大国があり、ヒシヤリ国の王子観徳大王を妬む十四か国が百万の兵を向ける。観徳は七万騎で迎え撃つ。天竺の天の川原で敵国王子、身の丈八尺の源白大王が二百貫目の鉄の棒を振るい、観徳の一丈二尺六寸の鉾を真つ二つに折った。

観徳はこの残りの杖で敵を掃い、木の葉を打ち落とす如く、一人で龍面大王、鬼赤大王、源白大王、金天大王、心文大王五大将の矢を防ぎ、三大将の頭を落とし、五方向の道を防いだ。これにちなみ、杖を「下り葉」、「五方」と名付けた。さらには軍笠を取って杖先に懸け、敵を倒す。この杖を「笠払い」とした。

天竺の天の川原の荒水瀬で防いだことにより「天の荒川流」と伝わる。

天神七代の初め、国常立命にこの流派が伝わる。ある時、御宇国の秋根命と彦根命の跡目争いがおこる。国常は悲しみ、ある夜、装束の四方房をはずして二人が交わす二本の杖の後先に付け、此れが目印になり、勝負がつかないように取り計らい、とりなした。二本の杖を「ふたはしら」と名付けた。その後、この流派では五色の房

を目印に付けることとなった。

鹿嶋大神宮、香取大神宮ではこの鉾棒を祭礼に奉納し勤めていくこととなった。

香取三神主、藤原朝臣清只社家六人で新荒川香取の一流と名付け、また、鹿嶋より六人出し、合わせて十二人十二本の杖となり、はじめて両大神へ奉上了。改めて棒と言うには木偏に奉るとする。その十二本を一本で一流ずつ十二流に分けた。この伝法書は常州鹿嶋香取両大宮司前少将長門守藤原朝臣清次公之御家に伝わる。(後略)

口上(いいだてとも言う)は奉納する経緯を申し立てるもので、本来僧(あるいは僧形の山伏、新発意)が行う。東北の風流では古式にのっとり、僧あるいは僧形の者が祈禱することで祭礼が始まる。坊さんが来ないと始まらないのである。風変わりな所では京都山城田山の風流では男児が大太鼓の上に立ち口上(画像②)するものもある。鷹取屋神社神主さんによると開催当初から僧職の参加はないという。

『宇目町誌』によれば、河尻の杖は長さ六尺二寸と『天

『竺伝来荒川流杖の事』に符合する。房の作り方も詳細に記述が見える。頭部の被り物は河尻ではガイシヤと称す。



画像② 京都府 山城田山花踊り

河尻の杖の口上は、もうしたてとして神杖伝記を語り、御神力、イイタテ、モウシタテと続き、秘伝書に続く長丁場らしい。

高天が原から筑紫、日向の橘小門おどの阿波岐原、豊国の速吸灘、など現実の地名が見えるのが面白い。神事と言いながら、まりしてんの法にして、眷属、大天狗、小天狗が登場、豊前国小嶽之山に鎮座するとされる。

天照大神が籠った天岩戸ノ前で鞍馬山の僧正坊、叡山の僧次郎坊が杖を始めたという。愛宕大権現の一流で、鈴木友重という人が伝え、佐伯領大坂本、稲葉領神野から伝わったとされる伝書もあるという。

杖、と言うか、棒と言うかのいわれを伝えていること、常州からの伝来と言うことは興味を引く。

奉納としての祭礼は、貞観五(863)年五月京都神泉苑で催された御霊会が嚆矢とされ、後全国に波及したと

される。

この場合の御霊とは、崇道天皇（早良親王）、伊予親王・藤原夫人（桓武天皇夫人藤原吉子（伊予親王母））・観察使（藤原仲成か）・橘逸勢・文屋宮田麻呂の六座を指し、高貴な立場に限られる。その御霊を慰撫するために歌舞などの管弦が催された。

京都では長保元（999）年僧無骨が標（しめ）祇園祭の鉦の原型とされるを立てて群衆を鼓舞扇動したため、藤原道長に追われるという記録が残る。末法思想、念仏踊りなどで全国的に、集団で歌舞する風潮が起こり、これを扇動した僧、僧形の山伏、河原者などは政治的には厄介者扱いされたとされる。

神に奉納する、神と遊ぶ形が「神踊り」と呼ばれる。大衆芸能化したものに風流（ふりゆう）、阿国の歌舞伎がある。

華美に豪奢にして集団で踊る風流として豊国神社の祭礼の図がある。天正二（1574）年大友宗麟の前で佐伯惟教が『小原木』を舞った記録があり、こういった文化は豊後には海路伝播したと思われる。

文献に見る高知市神田村小踊では、青山黒沢の、昭和

五十八年袴を付ける以前の神踊を彷彿させる着流しで、ガッソウを着けたシンボチも見える。



画像③ 高知市神田村小踊の図

『天竺伝来荒川流杖の事』はどこの、あるいはどなたがお持ちの文書か。昔刈さんは矢野徳弥さんに預かった気がする、と言われるので、矢野さんをお訪ねした。『天竺伝来荒川流杖の事』は笠掛^{かすかけ}の文書であった。

矢野さんは、すぐに平成十年に史談会でまとめた『ふるさとを語る 第一集 杖』の冊子を取り出され、これに当時の杖・棒の詳細が載せられていた。

しかも、明日、宇津々で杖がある、ということをお聞きし、出かけることにした。

翌日の宇津々愛宕神社は三々五々集まる手作り感満載の祭礼であった。杖の方々は三十七才から六十四才まで平均五十六才。平成十年の頃から人数は減少しているが、地元の方たちで構成され、装束の古いものは筒描きと見え、趣が感じられる。胸の紋は定紋とされる梅鉢がほとんどだが他紋も見られ家紋とのことである。人数が少なくなつた分重複して五種の演目を遣うという。

二十年足らずで本匠では堂ノ間が二年毎に開催される以外は、廃絶となっている。朗報としてはここでは神唄が聞かれたことで、これは今後の課題として情報を集めたい。

五来重は、念仏芸能は田楽が大きな基盤であり、鎮送的な面が念仏と結合した。常民には呪術性と芸能性なしには受容が困難であつたとする。

元来、小学校高学年男子が演じた風流を、今は小学校一年生の女子が演じるという状況も、過疎化・人口減少・少子化を実感する。

▲参考文献▼

- 豊後風流の研究 五十川泰 1979 弥生町教育委員会、佐伯史談資料
校注 国歌大系第1巻古歌謡集全 講談社 昭和51年復刻版、
日本庶民生活史料集成 日本歌謡集 本田安次 未来社 1982、
土佐の民謡 近森敏夫 中央公論社 昭和40年、
幡多郡誌 高知県幡多郡 大正14年、
絵の語る歌謡史 小野恭靖 和泉書院 2011、
馬の塔と棒の手―祭りに生きる伝統―名古屋博物館等